

行春の眠りさめけり雷一とつ 栃木 櫻井 閑山

坐布團を枕に春の假寝かな 越後 加藤 春陽

寒食の窓より見るや田螺とり 同

蕨野や露美しく旭の昇る 常陸 落花 籠

菜の花や馬にゆられて頬冠り 上總 高橋 波月

水や草や恍惚として霞みけり 同

安房の山上總の丘や初霞 上野 加藤よし子

追加

摘草や石を並べて渡る溝 無一庵 奇零

まだ早き櫻に惜しむ戻りかな 同

春風や薬師が前の飴細工 同

薄月に訪ひよる人や柳影 同

茶を立て、春惜みけり晝の雨 同

新婚の旅の戻りや春惜しむ 同

山 吹

林 天 然

雨にそぼてる山吹は

黄金玉なす許りなり

みかりくらしして丈夫が

駒をとめし柴の戸ゆ

みのなきこそと少女子が

花も恥らふ風情にて

語らぬ心意の優しさに

思を千々に碎さけるかな

愛國婦人會總會の記

紫波ゆかり子

四月二日第四回愛國婦人會總會を九段偕行社に

て開かる、車軸を流す計りなりし昨夜の雨は、今

朝は僅に收まれり、恰も此日總會に行啓ふはしま
す

皇后陛下の御威徳に感じて數萬の會員にも満足を
與へんとすなる天の好意にもあるべし。

抑愛國婦人會は創立以來日尙淺きに拘はらず、
非常なる盛大を來せり僅々年の間にかくも擴張し

膨大して其基礎を固めし會は他に類あらざるべし
況んや婦人の團體として此の如くめざましく生長

せるものをや、こは畢竟上 兩陛下を始め奉り
各宮妃殿下のいとも厚き御庇護を受くる所以と、

下又熱血溢るゝ計りなる主唱者奥村五百子刀自、
其他各役員の一心協力の致す所なり、特に昨年の

時局に際し、總裁 閑院宮妃殿下より優渥なる御
諭旨を賜はりし後は、會員たるもの更に感奮激勵

全國の姉妹に對して本會に盡力すべき激文を發し

たり、何事を措きても國家に盡さんとするの觀念
深き我國の婦人は此舉に賛同するもの甚だ多く、
明治三十六年の末には會員三万二千人許りなりし
を一年余り經し今日にては其十倍を超過し今や三
十六万余の會員を有するに至れり、あゝ實に盛な
りと云ふべし。

式は午後一時といへど我遅れじと早朝より詰め掛
くるもの引きも切らず十二時頃にはさしもに廣き
庭園も殆ど立錫の地なく只人もて埋れぬ、鞞鞞の
下にある會員は更なり遠國より上京せるもあり外
國婦人も數多見受けぬ、役員は大なる櫻花形に各
係り々の文字を記せる徽章を附して人々の斡旋
を努む、例の奥村五百子刀自は撫で髮木綿黒紋付
に濃き紫紺の袴を穿ち眉間に刻まれたる黒き皺
の中に一種の威光を輝かせつゝ、外國婦人を伴ひ出

で來り「外國のお客様です！はい御免なさい」と
 群集を掻き分け前の方に出入りしめさせて人々に向ひ
 「皆さんお静になさい怪我をしては大變です看護
 婦はたつた四人より居ません」と指四本をさへげ
 示しかひよくしく館の中に入れり、我の奥村刀自
 を面のあたり見しは今が始めなり、外國婦人に對
 する尊敬の念、多數會員に對する親切の心短かき
 言葉の中にも含ませるゝを知れり、即此人につき
 て豫て聞知せる男まさりの氣象をも想像し得られ
 たり、國家の爲苦心慘憺經營する其心情の切なる
 あるにも感じたり。
 氣づかはれし空はやう／＼に輝き渡りぬ、午後一
 時二十分
 皇后陛下には偕行社に御着あらせらる、御馬車の
 音に會員も其れぞと知りて静まるも畏し社の階上

階下には紅白緞子の幔幕を張り繞らし、庭園の正
 面なる階段には白布を敷き、其上に玉座を設け、
 御後には金屏風を立て廻らせり、別室にて御休憩
 あらせらるゝ中、金梨子地の御椅子置かるれば、
 各宮妃殿下以下貴夫人等は玉座の左方に、寺内陸
 軍大臣清浦農商務大臣等は右方に、參列せらる、
 鈴の合圖にやがて君が代を歌奏すれば、會長岩倉
 公爵夫人の御先導にて臨御あらせらる、一同最敬
 禮す見上げ奉れば玉容いと麗はしうおはしまし
 藤色地に白の花模様ある御服に同じ帽を召させら
 れ、白きシヨールに所々黒き筋あるをかけさせ給
 ふ、御椅子にも倚らせ給はで御直立遊ばさるゝを
 拜し奉るだにかしこしともかしこし。
 會長岩倉公爵夫人は靜に御前の階段に立ち出で開
 會の辭を朗讀せらるれば

陛下には

令旨

本日愛國婦人會ノ總會ニ臨ミ此處ニ各員ヲ見ル
ヲ喜ブ殊ニ今回ノ時局ニ際シ本會ガ能ク救護ノ
實ヲ擧ゲツ、アルハ満足ノ至リナリ尙將來事業
ノ益々盛ナランコトヲ望ム

との優渥なる御令旨を御朗讀あらせ給へり

參列者はかたじけなさに一同頭を垂るゝのみ、已
れが後の方に年の頃五十にもやなりつらん風姿賤
しからねど極めて素樸なる様せる婦人あり、今日
の總會に參列せんとて二百余里の遠路をふりはへ
て上京しつるなりと云ふ、如何に志厚き人な
るかな、わゝ我等都のものは常にも陛下を拜し

奉る機多きをかかると田舎の人たちこそ今日を措
きて再び日の光仰ぎ見ること容易ならねば、よく
拜し奉られよとて己れが前に押し出しやりつ、
其人の喜びたとふるに物なし。

次に 裁縫妃殿下御前に進ませらる、目さむる計
りなる眞紅の御服に種々の飾りある御帽を被らせ
給へれば、貴くもまた御美しくうはしますよと
見奉る人々もさゝやきぬ、やがて奉答文を御朗讀
あらせらる、これより 總裁妃殿下には有功章御
親授あらせ給ふ。

皇后陛下は此時始めて御着座まします、會務會
計の報告定款議事次第に終り後に各地よりの祝詞
祝電の報告あり、太陽の光いよ／＼輝きてさなが
ら深き御惠の露を頭上より浴するに似たり、我等
は畏さに只汗のあゆる計りなり、されどおやにく

に北風は吹き來りて 陛下の御裳の裾をヒラヒラと動かす、御咳二つ三つせき給ふ御傍に侍立せる香川皇后宮大夫の心つかひせらるゝを見るにつけてもあな 貴とあなかしこ、我等ももしもや心なき風の玉体を侵し奉らずやと心も心ならず辱うてます、汗に脊を沾しぬ。

先きの田舎人は拜し奉りては俯し、俯しては拜し奉り「御風召させ給ふことはあらずや」などひとりごちしいみじき感に打たれしさまにて、はては涙にかきくれたり、あはれ至慈至仁なる陛下の御徳は更なり、かゝる優しき心の人ありて眞に我國軍人の勇武絶倫なる所以なりとかつはかしこくかつは頼もしく我も覺えず感涙に咽びたり。

祝詞、祝電の中、奉天におはします 閑院宮 載仁親王殿下より寄せたまへるを、堀内陸軍歩兵中佐

朗讀す意氣衝天の大聲、耳底に響き、一言一句明に聞ゆ、嘗て我女子高等師範學校生徒の爲め同中佐の「沙河の會戰」の講演を聴きつる我には其れよこれよと感更に深かりき。

かくて 陛下には 各宮妃殿下を従へさせられ、君が代の奏樂中入御ましく、更に樓上に成らせられ、又も親しく來會者の状況を御覽せられぬ、普き御光を仰ぎ奉りし數万の會員の心には、一時に感喜の波動を起しつらん、かくてこそ今日此會に連りし光榮はわるなれと思ひしならん、午後三時に近き頃御けしきいとらるはしう御還啓まし

く式全く終れり。

會員は猶庭内に充溢せり、されど流石に軍國の婦人に耻ぢず、聊かの混雜もなく規律正しく狭き口より靜かに出づる様心地よし。

此日靖國神社境内及び牛ヶ淵公園内にはテントを張りて會員の溜所とし、音楽隊、大神樂等の余興あり、會員は式後此處に來り茶菓など喫しつゝ、休み見るもあり、又新宿御苑、總裁妃殿下御庭園の拜觀後樂園遊就館などの觀覽をも許されけり、はるく上り來りしかの婦人は如何にしつらん、郷里に歸りて定めて面目ある事なるべしなど考へ尙愛國婦人會の此後益々隆盛に赴かんことゝも希ひつゝ歸途につきぬ。

春の日影ののどかなるに大和心にたゞへらるゝ櫻の花も笑ひ初めんとする今日しも此盛大なる會に連り、まのあたり天つ日影を拜し奉り得しかしてさ狭き袂に包むに由なく、後日御盛徳の程忍び奉るよすがにもせんとかくは記しつ。

九州地方の狀況

久保やま子

五十

猶私の住居より十里貳拾里と遠ざかり肥后境の方に參りますと、殊更風俗も異なり衣服の仕立方から結髪の有様、夫れは、諄朴な者で穴居時代が追想致されます、併し衛生とか清潔とか申精神は殆んど皆無かと懷れます。目良山や椎葉山に參りますと、殆んど他郷人には男女の區別に苦む位、其一例は昔時と雖も此邊の婦人は眉もすらず、齒もそめず、蓬の様な頭髮を揺り被て居りますから、翁媪に至りては更に區別がないのです、衣服も隨て唯寒暑を防ぐに足るので、裏表は綴り合せし迄、袖とても筒袖でもなければ通俗の長袖でもなし、申さば手を通すに足る迄のもの、荒々しき麻布にて製して着用して居ります、背後は彼の有名の五